

第1回POPコンテスト



POP コンテストは、平成 17 年～24 年度に開催された弘前大学学生『言語力』大賞コンテストの後継事業として、図書館の利用促進及び読書推奨を目的として開催しました。

募集期間は、6 月 22 日から 7 月 31 日とし、40 点の応募がありました。応募作品 40 点を本と一緒に展示し、図書館利用者（学外者を含む）による投票によって 6 点が選ばれました。大賞は『話し方入門』（D・カーネギー著）の POP を書いた理工学部 4 年の本間弘樹さん、デザイン賞は『コミュニケーションをデザインするための本』（岸勇希著）の POP を書いた人文学部 3 年出川綾子さんが受賞し、佳作を 4 名が受賞しました。

表彰式では、郡館長から一人ひとりに表彰状が手渡されました。受賞者からのコメントとして、「この本は広告、PR の方法について書かれた本だが、それ以外でも普段の生活にも生かせる本」（出川綾子さん）、「数学を面倒くさいと思っている人でも、数学が楽しいと思えるようになる本。デザインのテーマとしては、みんなが楽しくなる、好きになるということに重点を置いて作った」（山本健太郎さん）、「この本は大学生と同年代の 4 人の青年達が、価値観やアイデンティティをしっかりとって生きていく中で、社会の苦悩や挫折を描いた作品。自分のことを振り返り、感動した話なので是非読んで欲しい」（福土開さん）、「私の一押しである志村真帆さんの本を POP でアピールした。著者の志村さんが静岡県出身なので、静岡から見た富士山と、湖面に映る逆さ富士を描き、本の表紙の青色と合わせたポップな POP を作った。この本は数学の堅い参考書ではなく、お菓子の詰め合わせのよう。理系文系問わず、読んで欲しい」（近藤美左紀さん）といった本に対する熱い思いが語られました。

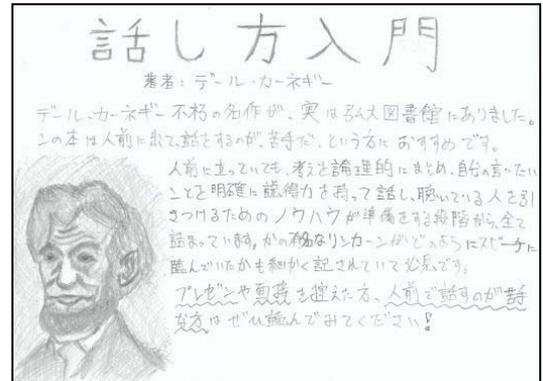
大賞

理工学部4年 本間 弘樹さん 「話し方入門」

私は POP コンテストの応募締め切り前日に職員の方に勧められたのがきっかけでこのコンテストに応募しました。日ごろから図書館を利用することが多く、頻繁に図書を借りています。今回の POP コンテストの他作品を見てみると、分野問わずいろんな本が置かれており、普段目にしないような本もあって大変興味をそそりました。

コンテストの紹介文にも書きましたが、今回私が紹介した「話し方入門」は主に集団の前で話すのが苦手だという方や発表、面接を控えた方に読んでほしいです。私自身も4年生になってから人前で発表する機会が増え、この本を読んで得たものを活用しています。この本は元々大衆の前で良い演説をするにはどうしたらよいかを過去の偉人の例も踏まえながら細かく説明しています。各章のエッセンスを活用すれば、集団の前で話すことにどう向き合えばいいかが見えてくると思います。

この本は実は私が図書館の利用希望図書の申請をして置いてもらった本です。この利用希望図書制度は私の今までの経験上教養につながるであろう本なら大抵は申請が通るので、知らなかった方はぜひ図書館に問い合わせしてみてください。



デザイン賞

人文学部3年 出川 綾子さん 「コミュニケーションをデザインするための本」

このたびは、『デザインをコミュニケーションする本』でデザイン賞をいただいたこと、とても嬉しく思います。投票して下さった方々に、感謝申し上げます。

POPを制作するうえで意識したのは、「まず、目に留めてもらうこと」でした。

図書館を利用する学生のタイプはさまざまです。学部や学年はもちろんのこと、興味関心の対象もそれぞれ異なります。だからこそ、特定の分野に偏ることなく、幅広い層に響くようなデザイン作りを心がけました。1人でも多くの印象に残るように。印象的なPOPがきっかけとなって、本を手にとってから読むまでのハードルが低くなるように。そういった思いを持ちながら構想を練っていきました。

パッと見て目に付くよう、色は鮮やかなピンクと白の2色のみとしました。モチーフは、冊子中のアイコンであるハートを用い、実際の本との連携も感じられるデザインを目指しました。ハートは一部のみを使い、POP上部に余白を残すことで、コミュニケーションが持つ可能性を表現しました。

今回のPOPコンテストは、人の心に残るものとは何か、じっくり考える良い経験となりました。制作中だけでなく、投票期間中もたくさんの気づきを得ることができました。このような機会を提供していただき、本当にありがとうございました。



佳作

理工学部2年 山本 健太郎さん
「数学ガール」

私の信条の一つに「生きるのに必要なことでなければ、つまらないことはやらない」というものがある。ここで因るのが、「生きるのに不必要な上につまらないけれども、やらなくてはならないこと」が人生には数多くあるということだ。そしてその一つは自分の興味のない分野の勉強だろう。こと数学においては多くの人がそうなのではないか。

この『数学ガール』は数学に対する意識を「つまらないかな」から「ちょっと面白いかな」に変えてくれる『本』である。読書というのは知識の獲得の他に、自分の意識を

「つまらない」から「面白い」に変えて、より愉快的な人生に誘ってくれるものだと思っている。そういった読書をさせてくれる『本』を探す時に、他人から薦められた本を選択するのは良いことだ。理由なく本を薦める人間はいない。その人がその本のどこに惹かれ、どのように愉快的な人生を送ることになったか想像しながら読むのも一興である。この文を読んでくださった方が『本』に出会って愉快的な人生を送ること、『本』を誰かと教えあってくれることを私は願う。

最後に、私のPOPを見てくださった方々、『本』を紹介してくださったPOPコンテストの参加者の方々、企画運営に携わられた図書館の方々に深く感謝する。



佳作

教育学部4年 福士 開さん
「三島由紀夫 全集 第7巻 鏡子の家」

『鏡子の家』という作品は、自分の価値観やアイデンティティを強く持っている4人の青年の苦悩や挫折、戦後日本を生きる人々の空虚さや虚無感を書いた物語です。現代を生きる私たちが無軌道に、無目的に生きているのではないかということ問いかけてくる作品であり、主要な登場人物である青年たちと年齢が近い大学生に読んでほしいと思って、紹介しました。

POPを作成するに当たり、どうすれば人の目を引くものに仕上がるかを考えることが難しかったです。ただあらすじや自分の感想を書くのではなく、どのような見出しが目を引くか、文字や絵をどういう色遣いにするか、文章の量はどれ位にするかなど苦心しました。

デザインをどうするか考えたとき、三島由紀夫といえば新潮文庫の表紙の旧デザインの印象が自分の中で強かったため、その表紙をオマージュしたデザインにしました。イラストは三島作品のエキゾチックな雰囲気を出すために、屋敷と主人公の鏡子の横顔をシルエットにしました。

第1回POPコンテストにおいて佳作を受賞したこと、非常にうれしく思うと同時に、投票していただいた方、POPを見てくれた方、主催して下さった附属図書館関係者の皆様に感謝を申し上げたいと思います。



佳作

教育学部4年 小笠原 銀河さん 「不思議の国のアリス」

以前から本を読むことが好きで高校生の時は図書委員会に所属しており、図書委員会の仕事の一環として図書館の本のPOPを制作することもありました。今回弘前大学附属図書館でこのようなコンテストを開催すると知り、当時を思い出してまたPOPを制作してみようと思い応募しました。

今回選んだルイス・キャロル著『不思議の国のアリス』は様々な映像化作品やオマージュ作品などがあり、映画やアニメーション作品を見たことがある方は多いと思います。ですが、この本に登場する現実ではありえないような不思議な生き物や世界観を、文章を読みながらゆっくりと自分のペースで想像しファンタジーの世界に浸ることができるのが原作の『不思議の国のアリス』の、そして読書の楽しさだと思い、映像化された作品しか見たことがない方々にもこのPOPを通して興味を持ち、原作を読んでみて欲しいと思いました。そのため、POPを制作するにあたり図書館に来た方が目に留めてくれるよう、POP全体の色合いを主人公アリスのエプロンドレスから連想される水色でまとめつつカラフルなトランプ模様を全体に配置し、大きく本のタイトルとアリスのイラストを描くなどの目を引く工夫をしました。



佳作

理工学部4年 近藤 美左紀さん 「線形代数演習帳：スマート解法」

▽POP作成にあたって

「なんちゃって理系」で、いつも数学の単位がギリギリ。最初は、必要に迫られてこの本を読んだわけですが…。何のための計算をしているのかがわかり、数学が嫌いになくなりました。同じようにつまずいている人に、こんなやり方もあるよ!とおすすしたいのです。期間中しばしば貸し出しになっているのを見かけ、嬉しくなりました。

▽教え方の参考にも

教職を目指している人にも薦めたい旨を書きました。こ

の著者の説明の仕方は独特です。例えば、公式を暗記させるということがなく、自分の言葉で理解できるように書かれています。教える人の視点で読んでも、発見があると思います。

▽お菓子屋さん

POPコンテストは夏からの開催だったので、みずみずしい洋菓子が度々登場するのを推しておきました。

▽デザインについて

本のカバーに倣い、空色をテーマに、著者の出身地・静岡県から見える富士山を中央に配置しました。カバーつきで見た方は、シェリアまでどうぞ。

